

「拒否が拓く〈政治〉——その現在と展望を探る」

大野 光明

“学んだことはすべて忘れ、夢想することからはじめよ。”

“国家とはわれわれ一人一人のこと”

——パリ五月革命（1968年）壁の言葉

■報告／問題提起のねらい——呼びかけ文から

- ・ 提案でも、協力でも、参加でもない——拒否から見えてくる、現在の世界を共に考えたい。
- ・ 「拒否」によって、既存の政治の枠組みが揺らぎ、別の枠組みが一瞬垣間見える経験
- ・ 「構成的」解体？

「沖縄の『軍事植民地』的状态の更なる深化・継続への明確な『拒否』を突きつけるこの間の沖縄での闘いの累積と、『3・11』後の反・脱原発の声の堆積によって、現在、この列島上では、『「拒否」が拓く〈前〉線』と呼ぶに相応しい非暴力・直接行動の連鎖が、築かれつつあるように思います。

そうした〈前〉線のありかを探りながら、それが拓く『拒否』の地平に日本の『構成的』解体へのベクトルを描き出すことに向けて、戦後日本国家の構成原理の原型／変容／現在を、改めて捉えなおすこと/それが、『アンラーニングプロジェクト・2013』の課題です。」

（生・労働・運動ネット，2013，「ご案内 アンラーニングプロジェクト・2013」）

■1. 今、何が起っているのか

(1) 2011→2013

国家の決定・合意と市民の拒否とのつばぜりあい（+ 世界各地の占拠や革命との共振）
システムの破綻とそれを隠し、破綻の顕在化を延期させるために、人々の情動に働きかける
ごまかしの政治 + 暴力的な排除や弾圧

《2012年》

- 4月27日 自民党「憲法改正草案」発表
- 5月5日 全原発稼働停止
- 6月16日 関係閣僚会議にて大飯原発再稼働正式決定
- 6月29日 首相官邸前抗議行動 参加者20万人
- 6月29日～7月1日 大飯原発ゲート前占拠・封鎖、大飯原発再稼働
- 7月23日 米軍オスプレイ 岩国到着
- 8月22日 首都圏反原発連合と野田首相との面会
- 9月19日 日米両政府 オスプレイ安全宣言
- 10月1日 米軍オスプレイ 沖縄配備強行
- 12月16日 衆議院議員選挙 政権交代（自公連立）

《2013年》

- 5月13日 大阪市・橋下市長 従軍「慰安婦」発言
- 7月26日 防衛省「新防衛計画の大綱」中間報告公表（敵基地攻撃を念頭）
- 9月8日 東京オリンピック（2020年）開催決定
- 9月15日 全原発稼働停止

10月1日 消費増税決定（2014年4月に8%へ）

12月6日 特定秘密保護法 可決・成立

(2) 「上手にだまされる」空気の蔓延。強固さと脆弱さを併せ持つようなシステム

- ・政府がおかしいことは分かりながら、だまされるほうがマシという社会の感覚
- ・生きづらさが蔓延しているにも関わらず、「困っている」「おかしいじゃないか」と発することができず、「真実」や社会的「弱者」を叩き出すような社会
- ・問題が個人化され、切断して理解される社会

「国を信じてはいないが上手にだまされるならいい、という空気が日本に蔓延しているように思えてなりません。それは現実逃避です。消費税であれ、社会保障や労働政策であれ、政府はこう言うが、事実は違ふと突きつける。一人ひとりが『私は困っている』という声を上げないと、社会はよくなりません。」（稲葉 2013）

「公人の無責任な『虚言』というものに対する、この社会、とりわけ日本社会の感覚の変化である。庶民の小さな『欺瞞』には、あるいは、特定の政治家が福島についてこぼした『真実』には、ときに、よってたかって血祭りにあげるこの社会の奇妙な『寛容』である。」（酒井 2013）

「いくら紛争地帯でも、年間3万人も死ぬことはそんなにありません。でも、日本ではそのくらいの人々が自殺しています。そう、この国は形を変えた戦場なんです。戦場では子どもも人を殺します。しかも、時には大人より残酷になる。」（西原 2012）

(3) 拒否への着目

- ・〈拒否＝わがまま、非生産的、非建設的、非制度的〉という見方は誰のものか？
「だが、3・11の災害の後でもなお、私たちは『今すすんでいる転向を見せる動機がない』と言えるでしょうか。」（西川 2012: 296）
- ・拒否＝システムのほころびと裂け目、新たな政治の瞬間的登場と経験。アートな領域。

■2. 拒否ということ

2-1. 拒否の言葉

(1) 沖縄からの言葉——オスプレイ配備反対から普天間基地封鎖へ

→制度としての民主主義＝暴力

「基地の過重負担に反対する手段を次のステップに進めなければなるまい。それは、軍隊にとって居心地の悪い社会的雰囲気をつくり出していくことである。」（新崎 2012）

「全ての民主的手法（間接民主主義と直接民主主義）を尽くしての「オスプレイ配備反対」の沖縄県民の総意を鼻であしらい、愚弄する日本政府官僚・防衛族等に対しての県民の怒りは頂点に達しています。全ての知恵と力を結集して普天間基地の閉鎖に向かいましょう。まずはゲートの閉鎖に向かいましょう」（沖縄平和市民連絡会 2012）

(2) 国会前からの言葉——秘密保護法反対

@elpaisa2005（2013年11月26日）

無駄と思っちゃダメ。文句があるなら今日はここしかない

@matsui_k_（2013年12月5日）

外国のニュースでよく政治、経済に対して怒れる民衆の暴動起こした映像見かけるけど今までどこか他人事だったのが、最近はもう他人事に見えなくなってきた。強行採決とか…色々ナメ過ぎ。

@mipoko611（2013年12月6日）

今日は国会前行って良かった。党利だの党略だの利害だのな一んにもないのに、自腹でやって来て、寒空の中声を上げ続ける何万人もの人をこの目で見たし。来たくても来られなかつ

た人はあの何倍だろう。70年サボった本気のデモクラシーだから簡単じゃないけど、見果てぬ夢でもないって思った。

2-2. 拒否がつくりだすもの

(1) 歓び——同じ空間と時間の共有。私／世界は変わってしまった。

人々の「実感」や「他人事」でない感覚は、個人として参加経験だけでなく、同じ場所・時間を共有した経験こそそのもの。その経験のなかで、人と人、声と声、経験と経験が響き合い、圧倒的な変化を生きてしまう。経験において、自分の変化と世界（の見え方）の変化が同時に起こる。（変化がそこに客観的に測定できるか否かはもはや「問題」ではない）。

「自分の立場を明確にしなればならぬというのならば、待機しているのだと言おう。私は周囲に問いかけ、自分の発見のもとに一切を解釈している。私は敏感な人間になったのだ。」（フェノン 1998: 140）

「集合的蜂起の場において共有された時間、そこで接触なり呼吸をともした経験が社会的身体に及ぼすもの、そこから諸関係を再構成する可能性の大きさを考えれば、感性の次元を決して無視できるものではありません。」（ベラルディ 2013）

(2) 創造的緊張と「作風」の創造

- ・ 空気のなかに埋もれている敵対性 ⇔ 恐怖する統治者たち
- ・ 「作風」を創造しつつ、社会に帯電している緊張や拒否の情念を加工・表現する実践
「街路にでたらそこに「緊張」と「危機」をつくりだせ、とキングはさらに呼びかける。デモンストレーションによって、潜伏する対立を激化させ、社会を危機的状態へと叩きこまなければならないというのだ。そしてその直接行動のひきおこし脅威をとおして、社会を、それを牛耳る連中を、問題解決の場に引きずりださねばならない。だから、白人社会は、当初、キングをこう指弾した。キング牧師は火のないところに煙をたててまわる「よそものの扇動者」、法破壊者、過激主義者（extremist）だ、と。[……]緊張と衝突を忌避するのではなく、それはむしろ積極的に構築され、そして「創造的」に活用されなければならない。「創造的緊張」とキングはいう。非暴力とは、暴力とはべつの方法での力の行使であり（どこかしら単調で貧しい）暴力を用いないそのおかげで、逆に多様な創造性を発揮する余地が開かれるべきものなのだ[……]60年代安保闘争、全共闘運動など大きな抵抗運動は、つねに新しいスローガン、組織方法、デモのやり方、言葉の使い方、自己のあり方の創造の場になってきた。そして「作風」の創造の場が街路なのである。」（酒井 2003）

(3) 政治のとらえかえし

- ・ 政治のフィクションの再確認——経ヶ岬で見た軍事ヘリ
「理解」「合意」「説明」「参加」「平和」…
- ・ 〈陳情する／お願いする市民〉ではなく、経験される〈包囲されている政府〉
@zansyou（2013年12月6日）
むかし山谷のドキュメンタリー映画で目にした「やられたらやりかえせ」という言葉が参議院議員会館前でシュプレヒコールされていた。あれからめぐってめぐって私も当事者だったんだと今ようやく本当に実感して、いっぱいになった。搾取と暴力の社会から逃げたい。みんなで逃げたい。
- ・ オルタナティブという磁場からの離脱
→ 国家によって与えられる政治／民主主義への「生産的提案」ではない政治
→ 与えられた争点や課題ではなく、自らが争点や課題をつくりだす政治

「沖縄問題は沖縄の問題ではないと、そのことを国家に対して明確に打ち出すことが重要なのです。代案を差し出し「解決」を申し出るなどということは、国家に処分を請願しているようなものです。そこで沖縄研究がなし得ることとは、承認欲求とは全く異なる新しい沖縄の主張と欲望を言語化していくことであり、そのためには、まず「沖縄問題」という設定自体が嘘であると暴いていくことが必要です。それらは私たちの問題ではなくて、私たちをとりまく国家や社会の構造的暴力の問題であると、突き返すことが求められていると思うのです。」(新城 2009)

「国民国家が変容しつつあるという話をすると、必ず返ってくるのは、そうした事実は認めよう、だが国家に代るものがありますか。代案を出さないで、国家の変質や崩壊を云々するのは無責任だ、という反応です。[...] それぞれの時点でいろんな選択肢があってどんどん変わっていくし、先は見えない。そんな革命をやっているときに、オルタナティブを出せと言っても誰もわからない。だけれど、旧制度が悪いことはわかっているし、実現しなければならない理想もある。それが革命であって、そのときの誠実な身の処し方というのはオルタナティブを出すことではない。」(西川 1996: 13)

- ・ 変わる政治の基準： 合法的／客観的／生産的／現実的か否か、ではなく尊厳をかける政治。→客観的／主観的、生産的／非生産的、現実的／非現実的…という二者択一が前提となる政治に対し、この線引き自体を批判的に問うこと。境界線を踏み越えてしまう自分(たち)
「これまで数えきれないくらいデモに行ったが、このデモには、自分(たち)の尊厳がかかっているような気がしている。自分(たち)は、こんなめにあってもなお、ひとつも怒らないような、そんな人間ではありたくない。自分(たち)は、こんなめにあってもなお、原発をとめようとしたくないような、そんな人間ではありたくない。／もしいつかどこかで、被災地の子どもたちから、『あの時、あなたは、どこで、何をしていましたか?』とそう問われた時、ちゃんと返事のできる人間でありたい。[...]それが尊厳だ。それは日本人としての尊厳ではなく、一人の人間としての尊厳だ。その尊厳をまもるために、デモにゆく。何度でもゆく」(小田 2013 [2011])

(4) 想像力や感性の獲得——つながりつづける人々、歴史、風景

- ・ 切断されてきた「沖縄」や「いろんな人」への接続。不可視化されていたつながりの獲得。
@gybe111 (2013年12月6日)
今日、機動隊の面前でコールしながら、ああ沖縄の人々はこういう苦い抵抗を続けさせられているんだなと思った。沖縄の人々は、自分たちの社会の子である沖縄の若い警官たちに立ち向かわなければならないことも多いだろう。なんという分断統治。なんという恥ずかしい支配だろうか
@greenEcho64 (2013年12月6日)
@gybe111 おはようございます。昨日はお疲れさまでした。沖縄のことは、私も同じ思いです。『標的の村』の普天間ゲート前のシーンを思い出します。本土に住む私たちにとって、沖縄の長い長い屈辱感を、ほんの少しだけ、初めて体感した夜だったのかもしれない。
@adisomak (2013年12月5日)
「日本を守れ！」のシュプレヒコールに「日本だけじゃ困るわよねえ」と周りのおばちゃんたち。めちゃ同意。日本人とか国民とか日本守れとかばっかじゃダメ。もうそろそろ気づこう。国籍・民族・宗教・文化・経済状況もいろんな人が生きてるんだよ〜。みんな守らんなくちゃ。
「あなた方は単なる「庁舎管理」という仕事のつもりかもしれないが、私たちをこうして排除しようとするのが、戦争につながる軍事基地を許し、戦争を許し、何より、今もず

っと不安や反対を訴え続けている地元の方々の声を踏みにじることにつながるのだということ

ことを認識してほしい」(2013年9月19日@京都府庁前)

- ・ 石破茂「テロ」発言——同時に恐れられていたものとしてのデモと沖縄

「沖縄・普天間移設問題に明け、それに暮れた1週間でした。[...] 今も議員会館の外では『特定機密保護法絶対阻止!』を叫ぶ大音量が鳴り響いています。いかなる勢力なのか知る由もありませんが、左右どのような主張であっても、ただひたすら己の主張を絶叫し、多くの人々の静穏を妨げるような行為は決して世論の共感を呼ぶことはないでしょう。／主義主張を実現したければ、民主主義に従って理解者を一人でも増やし、支持の輪を広げるべきなのであって、単なる絶叫戦術はテロ行為とその本質においてあまり変わらないように思われます。」(石破茂「沖縄など」2013年11月29日

<http://ishiba-shigeru.cocolog-nifty.com/blog/2013/11/post-18a0.html>)

■3. 希望——国家からの「独立」の連鎖

- ・ 国家装置からシャワーのようなメッセージを毎日浴び続けてきた国民としての私
暴力を正当化するための国家安全保障や国益という考え方

- ・ 難民化する私たち

国家から棄てられた私たち／国家の思うままにならない私たちを、〈いつか、どこかで〉ではなく〈今・ここで〉確認し、表現する

→ 拒否にあらわれる別の政治と私

→ 表現し、記述し、言語化しなければ垣間見えた亀裂は閉じてしまう。夢見られたものは現実へと転換してしまう。亀裂と夢を確保し続けるための言語化の大切さ。

【例】いとうせいこう ポエトリーリーディング 2011年9月11日

「廃炉せよ 廃炉せよ 廃炉のあとを花で埋めよう」

「だから諸君、私は問いたいのだ／悪の衝動があるならば、善の衝動もあるのではないか／悪がこの世を覆うならば、善もこの世に充ち満ちるべきではないか／悪に狂わされる人間がいるならば、同じように善に身をまかせる人間がいてよいのではないか」

「私たちのやっていることは 国家に楯ついているわけです」

「暗示の外に出ましょう 私たちには未来があります なければならない」

- ・ 私たちに力があることを思い出し、取り戻すこと

「新しい世界をつくっていけるのか、誰にも明確な答えはわかりません。できうることは、誰かが決めたことに従うのではなく、一人一人が本当に本当に考え、たしかに目を見開き、自分ができることを決断し行動することだと思うのです。一人一人にその力があることを思い出しましょう。私たちはだれでも変わる勇気を持っています。奪われてきた自信を取り戻しましょう。原発をなお進めようとする力が垂直にそびえる壁ならば、かぎりなく横につながりつづけることが私たちの力です。」(武藤類子、2011年9月19日)

- ・ 運動を続けてきた人・空間・時間がなければ、今／これからの変化はない

【文献】

新崎盛暉, 2012, 「反対行動 次段階へ」『沖縄タイムス』2012年9月20日.

稲葉剛, 2013, 「生活弱者の切り捨てに懸念」『朝日新聞』2013年10月2日.

大野光明, 2012, 「大飯原発ゲート占拠・封鎖という『希望』」『インパクション』186号.

沖縄平和市民連絡会, 2012, 「みなさまへ」(2012年9月29日)

小田マサノリ, 2013, 「ふつうのときのやり方じゃまにあわない」小熊英二編著『原発を止める

人々』文芸春秋社.

西原理恵子, 2012, 「自分守るうそについて」『朝日新聞』2012年8月5日朝刊.

酒井隆史, 2003, 「デモをやろう!」野田努ほか編『NO!!!WAR』河出書房新社.

————, 2013, 「ブラジルで FIFA のブレザーなんて着たがるヤツはいない。殴り倒されるからだ」(10+1 web site <http://10plus1.jp/monthly/2013/10/post-84.php>)

新城郁夫, 2009, 「新城郁夫氏に聞く『沖縄・問いを立てる』全六巻完結によせて——沖縄・否定性を突きつめる」『図書新聞』2910号.

フランツ・ファノン (海老坂武・加藤晴久訳), 1998 [1970], 『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房.

ベラルディ, フランコ (ビフォ) (櫻田和也編訳), 2013, 「攻撃される脳/痙攣する身体」『インパクション』192号.

西川長夫 (インタビュー・松葉祥一), 1996, 「国民国家を越えて」『インパクション』96号.

————, 1999, 『フランスの解体?』人文書院.

————, 2012, 「3・11後の国民国家論」『国民国家論の射程[増補版]』柏書房.